

## 五合庵附近の手毬歌 (方言のまゝ)

とんく殿様どちらへか、にほんたかちやへ帯買ひに、帯もよいし値もよい、たいんで見たればしなじんと、叔父御に取られて腹が立つ、そんなにお腹が立つならば、金やの金でも上げませうか、さつやのさつでも上げませうか、嫁にいく時箆筒長持送つてやる、送つてやる。

おら家のばい兒がよいばい兒、野にも由にも疑て見たら、松葉にさいれて眼がさめた。此處かどこと聞うたれば、鎌倉街道の森の下、森についでしなの町、しなの町から何買ふた、縮緬更紗の帯買ふた、だんにくるとて買ふて来た、なばさにくるとて買ふて来た、なばさが居ないもの死んだもの、なばさが死なれてけふて七日、けふて七の墓ど、縮香三本縮香のやぐらへ竹三本。

ことらさん、ことらさん、だいちの嫁御はやでござる、打ちもたいきもさつしやんな、打ちもたたきもさせんが、奥の座敷へ坐らせて、おまんま三膳しぜ五膳、七つさらく酒三杯、それがうすだら出ていぎやれ、出ていぎやれ、道や知らぬ、お宮の前まで送ります、お宮の中の啼く鳥が、あいしんこいしんこいしんこいしんこいしんこ、二に香箱、三に手箱、三にさいらしん鴨の鳥、かだんにくるとて貰ふて来た、おいまにくるとて貰ふて来た、おいまが居ないもの死んだもの、それがうすだら墓所へ、墓のめぐらへ松三本、松のめぐらへ竹三本、鷹なぎやんぎやんさへづりや、おとつ、あかかさが金山へ、一年めるともまだきやらぬ、二年

めるともまだきやらぬ、三年めいたら女郎が来た、女郎が着物に血がついた、血だかべんたか見てくりやれ、血でもないしべんたもないし、おとつ、あかかさが買ふてくらしたさいべんた、さいべんた。

みそらこうばい三年みそだ、四年大こで、こうばいて、こつこつこうばい、隣のはあさが、死んでまた来て、上座へ上がつて、煙草呑んで、吸ひ殻落して、笹山走るがおやさいのさい、柵から落ちた、うどん飽丁が、といでもといでもときめがつかぬ、つかぬでおやさいのさい。

越後長岡大こ町、ちだこ町どが庄屋さん、庄屋の娘がおたのとせ、おたの、三郎が密めけて、下に縮緬長じばん、上に白むく着かされて、頭勝山びんたほし、上にかんざしちよいとさし、後先見れども連がない、天上見たれば天とさま、南無阿彌陀佛を連にして、さゝ行きませう極樂へ、極樂へ。

おしみさおしみさ、どごいぎやる、あつちの町へ餅買ひに、餅買ふて何さしやる、おつきに食はしてはらまして、男の子を生まして、嫁とつてくりて、嫁の前へ茶出して、茶盆茶々苦茶取あうて、裏へ出て見れば、梨の木が三本、杉の木が三本、丁度六本あつたれば上から鳥が巢をかける、下から雀が巢をかける、どういふて、さやづるや、おつきともだち墓まへり、墓まへり。

からすく何處へ行く、薩摩の山へ、薩の山から谷底見れば、ちまな子供が小石を拾ふて、紙についでお寺へ上げて、お寺女郎衆が金だと思ふて、明けて見たれば小石でござる、今の子供はかしこ子供、あれまかてつかいな、これまかてつかいな。